

医師会だより

在宅死



自宅死と検視？

介護されている方が自宅で亡くなると必ず警察が来て検視がなされると思っっている方が多いかと思いますが、必ずしもそうではありません。

かかりつけ医の判断

がんの終末期や高齢など明らかに病気が原因でかかりつけ医が「事件性がない」と判断すれば、自宅でお亡くなりになった場合でも警察に連絡する必要はありません。

しかし、病氣療養中であっても自宅で突然亡くなった場合は救急車を呼ぶ場合がほとんどで、救急隊が到着時すでに死亡していると判断すると警察に連絡し検視となる場合が多いのも事実です。

司法解剖と承諾解剖

たとえ検視となっても「殺

あなたの笑顔が必要ですよ」

大村市医師会潜在看護師研修事業

看護師への復職を考えている方、復職のための研修を受けてみませんか。詳しくは大村市医師会まで。

解剖を実施できるようになりました。

死因の究明は大切

死因を正しく判断することは隠された犯罪を見つけ出すだけでなく、新しい病気の発見など医学的にも重要です。

最近ではCT、MRIなどの画像を用い、遺体を傷つけずに死因を究明するシステムを導入し、「死因不詳」を減らす努力がなされています。

かかりつけ医に連絡

在宅医療の場合、かかりつけ医と連絡が取れていて、たとえ死亡される瞬間に医師が立ち会ってなくても、その後かかりつけ医が来訪し、死亡確認した上で「事件性がない」と判断すれば警察に連絡せず検視とはならず済みます。

検視になると、警察官が来訪し慌ただしくなりますが、決してご家族を犯罪者として扱うことはありませんし、必ず解剖になる訳でもありません。

安らかな最期

本人、ご家族にとって在宅死は安らかな最期のお別れができる方法のひとつです。

新型コロナウイルスワクチンの副反応

新型コロナウイルスワクチンの副反応については、局所反応として接種部位の痛み、全身反応として発熱、頭痛、倦怠感、筋肉痛などがあり、また稀ながらアナフィラキシー（急性アレルギー反応）を生じることがあります。

新型コロナウイルスワクチンは筋肉注射で、インフルエンザワクチンは皮下注射で接種します。皮下注射よりも筋肉注射は深く刺すことから、「より痛いのでは」と一般的に思われていますが、痛みを感じる知覚神経は皮下に多く筋肉には少ないこと、またB型肝炎ワクチンの筋肉注射と皮下注射を比較した調査では、痛み、硬結、発赤など全ての局所反応は筋肉注射でその頻度が低いことが確認されています。注射された時に、思ったほど接種部位の痛みがないと感じられた方は少なくないのと思えます。

筋肉注射の方が局所反応の頻度が少ない

全身反応出現時には解熱剤で軽減

一方、発熱、頭痛、倦怠感、筋肉痛などの全身反応は、接種の翌日以後に出現しますが数日で軽減します。全身反応の出現頻度は、年配者よりも若年者で、男性よりも女性で高いことが確認されています。37.5度以上の発熱の頻度は、20歳代の女性では約50%であるのに対し70歳代の男性では10%以下の出現率です。新型コロナウイルスワクチンは年配者にやさしいワクチンと言えます。

副反応には個人差があり、接種の翌日、1日中寝込んでしまう人と全く症状の無い人にわかれます。副反応の出現時には市販の解熱剤を服用すると症状が軽減されます。

【医心伝心】大村市では医療従事者と高齢者の半数以上の接種が終わりました。「心配だったけど、打つてよかったです。安心して生活できます。」多くの人の感想です。